

紀伊國屋書店

哲学者 アリストテレス

ジョン・L・アクリル ■ 藤沢令夫 山口義久 訳

著 者

John Lloyd Ackrill

1921年イギリスに生まれる。1948年オクスフォード大学卒業。グラスゴー大学、オクスフォード大学の教職を経て、1966年よりオクスフォード大学の哲学史教授。著書・論文については「解説」参照。

訳 者

藤 沢 令 夫

1925年長野県に生まれる。1951年京都大学文学部哲学科卒業。現在、京都大学文学部教授。著書に『実在と価値——哲学の復権』（筑摩書房）、『イデアと世界——哲学の基本問題』、『ギリシア哲学と現代——世界観のありかた』（以上、岩波書店）、『自然・文明・学問——科学の知と哲学の知』（紀伊國屋書店）その他、訳書にプラトン『国家』、同『パイロス』、ソボクレス『オイディプス王』（以上、岩波書店）その他がある。

山口 義 久

1949年青森県に生まれる。1973年京都大学文学部哲学科卒業。1978年同大学院博士課程単位取得。現在、大阪府立大学総合科学部講師。論文に「プロティノスにおける『可能』と『現実』——『エンネアデス』II 5」、『大阪府立大学紀要（人文・社会科学）』第27巻、「アリストテレスの質料に関する一考察——『構成因』と『基体』」（『西洋古典学研究』XXXI）などがある。

哲 学 者 ア リ ス ト テ レ ス

定価 3000 円

1985年 8 月31日 第1刷発行©



発行所 株式会社 紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3の17の7

電 話 (354) 0131 (代表)

振替口座東京 9-125575

出版部 東京都世田谷区桜丘5-38-1

電 話 (439) 0125 (代表)

郵便番号 156

ISBN 4-314-00453-3 C1010

Printed in Japan

印刷 理想社印刷

製本 三 水 舎

日本語版へのまえがき

私の著書が日本語に訳されたことをうれしく思うとともに、本書がこのようなかたちで日本の研究者に役立つことを心から望んでいる。私は本書を独自の観点と目的にそって書いた。つまり、アリストテレスに関する情報を提供することよりはむしろ、彼の哲学と彼の論ずる哲学上の諸問題とに積極的な興味をよび起こしたいと望んだのである。私の全般的な取り組み方の全体については第一章で説明する。

数年前私はオクスフォードで、恐悦にも藤沢教授にお会いできた。また教授が英語で発表された論文にも感銘を受けた。それゆえ、教授が本書の日本語訳の責任者となられたことは私の喜びである。この仕事に多大の労をとられた藤沢教授と、彼の協力者山口氏に、深く感謝する。

まえがき

本書の目的は、たんに情報を提供することにとどまらず、さらにアリストテレスの取り組んでいる哲学上の問題や、彼が用いている議論や観念に興味をよび起こすことにある。私は、彼の哲学的探求の並はずれた幅広さと、それがわれわれに与えてくれる興奮とを明らかにするように、また彼がこれほど現代の哲学者たちから高い評価をえているのはなぜなのかを示すように努めた。本書の読者が、さらに自分自身でアリストテレスを読もうと思うようになることを私はせつに希望している。

本書の目的と内容のもっと詳細な説明は第一章にゆずる。

私に激励と助言を与えてくれたヘンリー・ハーディとジューディス・アクリルに、また練達したタイブを打ってくれたエルジー・ヒンクスに心から感謝する。

一九八〇年九月オクスフォードで

J・L・A

目次

第一章 序説 9

本書の目的／アリストテレスの生涯／アリストテレスの哲学／いくつかの論題と考える

第二章 アリストテレスの仕事ぶり 29

アリストテレスの哲学するやり方

アリストテレスの作業の実際

概念上の探求——性格の弱さとは何か、放埒とどのように違うのか／実践上の根本問題——

人間にとって最善の生とは何か／重さと運動についての、なかば数学的な議論／記憶についての疑問／明日の海戦——決定論についての有名な議論／変化には始まりも終わりもない

第三章 変化の分析——素材と形相 59

『自然学』第一巻から／いくつかの問題

第四章 自然科学における説明 81

自然、素材、形相／説明のタイプ／目的論／必然性／生物学的著作における実例／いくつかのコメント

第五章 心の哲学 125

心身問題に対するアリストテレスの取り組み方

アリストテレスの立場／引用による例証

感覚的知覚とその他の機能

魂についてのアリストテレスの説明

第六章 論理学 173

形式論理学——アリストテレスの三段推論式理論／形式論理学におけるアリストテレスの業績／いくつかの問題

第七章 科学の哲学 203

論証と科学的知識／科学における定義／科学的探求／アリストテレスの説明の理想像

第八章 哲学の方法 229

科学の出発点／問答法と哲学

第九章 形而上学 247

第一哲学

一般形而上学

実在と実体／素材、形相、本質

神学——神の存在と本性

永遠で連続的な変化／不動の第一動者／神と世界

第十章 倫理学 287

いかに生きるのが最善か

倫理的な徳と実践知／哲学的観想／最終的な処方

行為の哲学

行為／選択と思案／理性に反して行為すること（アクラシア）／アリストテレスのアクラ

シアー観

責任と言ひ訳

自発的と非自発的／混合的行為／無知／行為の同一性／責任

文献案内
331

解説
337

索引
350

第一章 序 説

〈本書の目的〉

本書はアリストテレス哲学への案内書である。この章では、私の書いたのがいかなる種類の案内書であるかを明らかにし、同時に、この案内書が調査する問題領域についてもいくらか述べたい。

哲学者アリストテレスへの案内とは、彼の教説を解説することではなくありえないと思われるかもしれない。彼の教説がどのようなものであるかは、今では専門家がよく知っているはずであり、必要なのは、ただそれを専門外の人々のために、できるだけ明確に要約して示すことであると。

とんでもない。いくつかの伝統的な見方とは反対に、アリストテレスの哲学はさまざまな意味で「開かれた」ものであって、閉鎖的な教説の集合体ではない。いったいなぜ、アリストテレスは「教説」なるものの持主である、いつでも見なされるのであろうか——他の哲学者たちは、「見解をもつ」とか、「提案を行なう」とか、「理論を提示する」とか言われるのに？ それには二つの理由があると思う。

まず第一に、体系的で包括的な哲学を展開することを、そして探求している問題についての最終的な正しい結論に到達することを、アリストテレスが実際に目ざしているという事実がある。彼はよく、一

つの考察を行なう際に、別の考察によって導き出された結論を根拠として用いることがあり、また自分の得た結論を自信をもって差し出すことも多い。要するに、彼は広範にわたる諸問題を解く鍵を持っているように見え、彼の話す言葉は非常に権威のあるものと聞こえるのである。

第二の理由は、彼の著作が長期間にわたって、あたかも本当に権威ある教説の集合体を含んでいるかのように、研究されていたことである。彼の「論考」や「教理」は、最終的・決定的な言葉と見なされていた。研究者たちは、それらを批判的に評価することは奨励されずに、ただ、そこに疑いもなく含まれているはずの真理を学んで受け容れるように奨励されていたのである。

実際には、アリストテレスの哲学を教説の集合体として説明することは、大へんな誤解の種にちがいない。なぜなら、彼の著作は、プラトンのアカデメイアで研究していた時期から、六三歳で歿するまでの、長年月にわたるものである。その間に彼の考えは発展し、ときには変わってしまうこともあった。彼は古い議論を捨てて新しい議論を考案した。また中心的な問題を、さまざまな文脈の中で、さまざまな武器を用いて取り扱った。したがって、彼の思想を真剣に理解しようとするなら、必ずその思想の動きを考慮に入れなければならないのであって、彼の思想をたんなる結論の目録のように扱ってはならないのである。のみならず、アリストテレスが哲学に向かう姿勢は、全体として公開的な、議論をよびかけるものであって、教条的なものではない。彼は、問を発し、問題を明らかにし、考えうる解答もしくは解法を徹底的に吟味することによって前進できると主張しているし、また実際にも、かなりの程度まで前進している。

ここで誇張に陥ってはなるまい。たしかにアリストテレスは、しばしば校長先生のような話し方を用いて、まだ取り扱い中の事柄について、あたかも最終的な真理が得られているかのように、確信ある口ぶりで語ることがある。また、彼が世界についての最終的・包括的な哲学的理解をひとつの理想としていたこともたしかである。

だがそれにもかかわらず、ほとんどの彼の著作からは、警戒と疑義の声もまた、著作によって大小の違いこそあれ、響いてくる。多くのことが不分明で不確実のまま残り、一連の問題に対する解答が新たにいくつもの問題を浮かび上げらせ、重要な争点について議論が伯仲して決着がついていないように見えることもある。アリストテレスの哲学を教説の集合体として説明するならば、その持っている生命と活気をすべて取り去ってしまうことになる。彼の哲学はむしろ、たがいに発展していく問題と解答の連鎖にもっとよく似ている。

アリストテレスを哲学者として真に特徴づけているのは、彼の得た結論（彼の「教説」）の多さと重要さではなく、彼の論証や観念や分析の多さ、強力さ、緻密さである。そしてそれはこのほうがよいのだ。なぜなら、ある教説を学ばねばならないということは退屈な仕事であり、とくにその説が誤りだと知っている場合にはなおさら気が滅入るものだが、興味深い議論というものは、それが結論と称するものを本当に確証しているといないとにかかわらず、面白くてためになるものだからである。近代の天文学者たちは、アリストテレスの天体に関する説明をきっぱりと拒否する。それにもかかわらず、彼がどのような議論によって、宇宙は永遠に運動する球体にちがいないという結論に達したかを見ることは、

この上なく興味深いことであるのに変わりはない。さらに、アリストテレスの主要な諸観念は何世紀にもわたって哲学者たちを刺激し、論議をよび起こしてきた。それはまさしく、それらの観念が、切り取られて枯れてしまった教説などではなくて、さまざまに応用し、解釈し、展開することのできるものであるからにはかならない。

そういうわけで、哲学のあらゆる問題と奥義とを、きちんと包装され、宛名もはっきり書かれた、いくつもの小包の中に包みこんでしまった偉大な「知識者」というイメージでアリストテレスを考えることは、ひろく一般的な思い違いなのである（この思い違いは、古代や中世の「アリストテレス主義者」と呼ばれたある人々の態度と信念に由来する）。

私が次に言おうとすることは、もう少し異論をまねくことかもしれない。すなわち、アリストテレスを相手に、哲学の議論にふけることは、楽しくもあり、報われるところも多いものだと思えるのである。ちょうど笛の初心者が師匠の技倆と演奏に喜びをおぼえるように、われわれもアリストテレスの議論の洗練ぶりや簡明さ、意味連関の豊かさに喜びをおぼえる。しかもその議論に深く立ち入って行けばいくほど、その喜びは大きくなる。

ところで、もしわれわれの目的がアリストテレスをたんに理解することにとどまるのなら、彼の議論への「立ち入り」は注意ぶかく制限されなければならないことになる。われわれは、彼の思想のうちに入りこんでも、彼の思想を超えて先に進んではならず、二十世紀の装備や用具をたずさえぬように注意しながら彼の知的旅路を追体験するように努めねばならないことになる。そのような理解を得るこ

とは、たしかに目ざすだけの価値があることであり、想像力と知的能力のどちらを欠いてもできないことである。

しかしながら、アリストテレスについて、たんにある程度の理解を得るということだけでなく、彼の立ち向かった哲学的問題のいくつかをもっとよく理解することまで望んでいけないことはない。この場合には、彼を現代人であるかのようにして議論に引き入れることが許される。彼は、問題や答を簡潔に述べる羨ましいほどの資質に恵まれており、彼のひき締まった文章は、限りなく思考をかき立てるものである。彼の文章や議論のどれかがわれわれを刺激して、われわれ自身の疑問や反論を出したい気になるのなら、われわれは、古代の哲学者に現代の武器で立ち向かったからといって罪の意識に悩む必要はない。彼のほうはそんなことを少しも気にしないだろう。彼が今「浄福者の島」にいるとしたら、きっと間違いなく彼は、自分が今使える知的手段のかぎりをつくして、大いに議論していることであろう。

たしかに、われわれが二十世紀の思想や概念をもちこむなら、われわれのアリストテレス理解の歴史性が純粹さを減じることには間違いない。しかしわれわれが望むなら、それくらいの犠牲をはらっていないことがあるか。古代の哲学者たちの議論について論ずるのに、現代の概念を用いたり、彼らがあたかも現代人であるようなつもりで彼らと議論したりすることは、それだけでは誤りではない。それが誤り（時代錯誤）となるのは、その人が純粹に歴史的な仕事をすることを志し、実際にそうしていると主張する場合だけである。

アリストテレスと議論し、彼から学ぶことは難しいことではない。なぜなら、彼が一所懸命骨折って

定式化した数々の問題は、今なお哲学の中心問題であり、彼がそれらを解こうとして用いた概念や用語は、今なお効力を失っていないからである。私がこの本で目ざしているのは、彼の哲学についての情報を提供することと同時に、その哲学に対する積極的な興味をかき立てることである。そのために私は、私自身の哲学的な問を發し、私自身の哲学的な論評を加えた。それは、アリストテレスの語っていることが議論さるべき問題としてあるということを讀者に思い起こしてもらうためであり、さまざまな問題について讀者の思考を刺激して、さらにその続きを考えてもらうためである。

アリストテレスの著作は組織立った形で配列されている。最初に論理學上の諸論文が置かれ、次に自然に関する一連の数多い著作が（それらの間にも合理的な配列があたえられて）続く。その次には形而上學の諸卷が置かれ、最後に「実践的な」問題——倫理學、政治學、弁論術、美學——を扱った著作が来る。これらのテクストは、アリストテレスの死後編集されて、この順序に並べられたのである。彼自身がこの順番で書いたわけではない。だから、その配列があたかも彼自身のものであるかのようにして彼の哲學を解説するなら、全く間違った印象を与えることになる。

じっさい、今われわれが手にする著作集のように、彼がそもそも何らかの順序で著作を書いたと言うだけでも、かなり誤解のおそれがある。なぜなら、いくつかの著作は完成された形になっており、文体にも磨きがかかっているけれども、多くの著作は依然として講義室の匂いが脱けておらず、書物として公表するための決定稿であるよりは、講義ノートのようなものである。アリストテレスは永年にわたって講義を行ない、何度も同じ問題にたち返って論じているので、当然、自分の講義ノートにも訂正